

八戸近郊の「中国に残された日本人」の証言記録 (1)

渡 辺 武 秀*

A Report of Witness of Japanese People in Hachinohe who had been Left behind in China after The World War II (1)

Takehide WATANABE*

概論

日中戦争結束以後一段时间、中国大陆上留着许多日本人（以下称他们为“残留日本人”）。他们由于各种各样的原因，当时不能回到日本来。但现在大部分“残留日本人”已经回到日本生活。因为在电视，广播，报纸，杂志等媒体上报道过，所以很多日本人都知道这件事情。但是，对于“残留日本人”的详细情况，知道的日本人还是很少。

日本大城市的“残留日本人”情况，我以为，有的研究者已经调查过。但是，“残留日本人”为何留在中国，在中国如何生活？我觉得这些详细的调查还是不太多。在八戸市呢，可能有，但很少，比不上大城市。根据这些情况，开始了一些居住在八戸市的“残留日本人”的调查。日中戦争結束以後，已经过了六十多年了，“残留日本人”们都已经很老了。如果不早调查，我们将永远失去知道历史真相的机会。

这篇文章是我最近调查八戸市的“残留日本人”情况后写的报告。

Keywords: China, Japanese People, Hachinohe

はじめに

日中戦争が終わった後、様々な理由で日本人が中国に残されたままになっていたという事実については「残留孤児」に関するテレビ，新聞の報道，或いは雑誌，書物などからすでに知らない人はいないのではないかな。

この「中国に残された日本人」に関わる問題は，実は，日本敗戦から 60 年が過ぎ去った現在もまだ十分な解決が行われていないのではないかなと思っている。これほど戦争の傷は深いのである。日本の政府機関や一般の人々の，この「中国に残された日本人」に対する誤った認識，処置のためには日本に帰国後の生活はなお苦しく，その人たちもその人たちの子どもも苦しんでいるかのように見える。

ところで，この「中国に残された日本人」に関する，青森県，八戸での過去，現在の記録，調査はどのようになっているのだろうか。現在，八戸近郊の「中国に残された日本人」たちの声はどのくらい記録として残されているのだろうか。早く調査しなければ，歴史の証人たちも年を取って行くし，もしそのような人たちが亡くなるようなことがあれば，「中国に残されたという事実」「その後の事情」はすぐに風化してしまうのではないかな。このような危惧が年々大きくなり，今回，この方面の調査研究に取りかかった。

したがって，これから，できるだけ多くの「中国に残された日本人」「その子ども」を捜し出し，その人たちの話を聞き，それを記録として残しておきたいと考えている。このような不幸な出来事を二度と繰り返さないためにも必要なことである。また，戦争は所謂「戦い」が終わった

平成 19 年 1 月 5 日受理

* 感性デザイン学科・教授

後も、その傷を長く引きずって行くことをしっ
かり文字に留めておかねばならないと考える。

今回のこのノートは、このテーマの第一回目
の報告になる。このテーマに関わる報告は、も
ちろん今回で終わりではなく、更に続いて行くこ
とになる。

一 今回の調査研究実施の動機となっている ところ

なぜこのようなことをしようと思いついたの
かについてはいくつかの理由がある。もちろん、
そのおおもとは中国語、中国の文学、社会、歴
史というところに興味があるという処から出発
しているのだが、特に中国での経験したこと、或
いは八戸での経験などが大きいと考えている。
そして、現在、私が知り合った人々のことを、こ
のような人々が関わった歴史的な事件を、文字
として残しておくことは筆者の義務ではない
か、とも感じるようになったのである。

以下、その動機が起こったところをまずいく
つか述べておくことにする。

① 中国の遼寧省瀋陽市で知り合った「残留 婦人」たち

筆者が「中国に残された日本人」を知ったの
は1985年頃、中国において、である。1984年9
月から86年8月まで中国遼寧省瀋陽市の遼寧
大学に留学するが機会あり、そこでひょんなこ
とから「中国に残された日本人」と交流するこ
とになった。

瀋陽市の北、遼寧大学の近くに北陵公園とい
うところがある。この公園で毎年6月1日に朝
鮮族の人々が大量集まって祭りを開いていた。
この祭りに遼寧大学の日本人留学生の一人がた
またま出かけて行った。すると「中国に残され
た日本人」に「あなた日本人でしょう」と話し
かけられ、そのまま知り合いになったというの
である。後になって分かったのだが、瀋陽市に
いる「中国に残された日本人」は一人ではなく、合
わせればかなりの数になり、その人たちも朝鮮

族の人に混じって、この6月1日に自分たちで
作った日本料理を持ち寄り、まるで同窓会を開
くかのような気持ちで北陵公園に集まっていた
のである。外国にいれば日本人が懐かしいし、ま
た日本語を喋る相手が欲しいのである。

この留学生の仲介で筆者も「中国に残された
日本人」に会うことになり、そしてその後、時々
その人たちの家を訪ね、いろいろな話をそれら
の人々から聞くようになっていった。

「中国に残された日本人」はしばしば「残留孤
児」「残留婦人」というような言葉で呼ばれてい
る。「残留孤児」と「残留婦人」の区別はどこに
あるのか。『氷晶のマンチュリア（満州）』^(註1)は
「残留婦人とは終戦当時十三歳以上の女性の残
留邦人を指す。十二歳以下は残留孤児とされ
た。」^(註2)と述べている。つまり「十三歳以上なら
どんな状況であれ、身の処し方を自分で決定し
得る、自由意志で、中国に残った」^(註3)とされて
おり、この結果「これまで国の残留婦人への施
策はほとんどなにもなかった。」^(註4)ということ
まで起こることになった。

1985年、瀋陽で筆者が会って話を聞いたのは
「残留婦人」と呼ばれる人たちだった。しかし、
その当時、日中戦争が遠い昔のことで、今もな
お日本人が中国に残っているということが、す
ぐには理解できなかった。まずなにより、日本
人の伯母さんたちが、中国にもう何十年もいて、
日本語を使う機会もそれほど多くなかったに違
いがないと思われるのに、綺麗な日本語を話さ
れるのにまずビックリした。そして、交流するう
ちに、我々が想像したよりも多くの人たちが瀋
陽、瀋陽近郊におられることも分かってきた。

一度遼寧大学で留学生とこの日本人の伯母さ
んたちとの交流会を開いたことがある。この時
には十三名の日本人の叔母さんが出席され
た。^(註5) いつも敗戦時期の話、或いは中国の政治
変動時期の話というわけではないが、このよう
な話しになると相当生々しい内容を聞かされ
た。^(註6)

もう亡くなった人もかなりいる。今、私が情

報をつかんでいるだけでも、知り合いだった「残留婦人」のうち四人の方がすでに亡くなられた。熊本出身の葉山さん、栃木出身の佐伯さん、広島出身の吉田さん、長野出身の藤田さんである。そして、瀋陽に残ったままの方もいる。出身は忘れたが高井さん、香川出身の須波さんは瀋陽に残ったままである。この方々とは連絡が途絶えている。

日本に帰国され今もお元気な人もおられる。また今東京に住んでおられる舌間さんと、岩手県の一関市に住んでおられる奥田さんである。この二人には日本に帰国されて以後のことも聞きたいと思っている。^(注7)

この伯母さんたちの中の、熊本出身の葉山恵美子さんが口癖のようにいわれていた話を以下に載せておく。^(注8)

一八八三年五月、あけぼの会の招待で、再び再び日本へ行くことができました。六月、熊本県庁援護課に行った時のことです。残留婦人がもう一度、国費で帰国できるようにお願いしたのです。中国の生活事情では旅費などつukれないからです。係官はこう言いました。「いま、国はお金がないのでそれはできません。あなたたち、どうして引揚げてこなかったのですか。戦争のためじゃなく、あなたたちは好きで中国に残ったんでしょう。/私は憤りと同時に悲しくなりました。私たちのことをそのように思っていたからです。いま孤児は戦争犠牲者として扱われています。その母親、婦人の私たちはどう違うのでしょうか。/私は中国で生きています。命を救ってくれた主人と、精神的に支えてくれた中国の人たちの恩に少しでも報いたいからです。

「残った」のか「残らざるを得なかったのか」は非常に微妙ではあるが、少なくとも「好きで残った」ということではあるまい。葉山さんはすでに亡くなった。まだ言っておきたいことはなかったのか等と思うことがある。^(注9)

② 八戸市に住む「残留孤児」のある事件

八戸市内に「残留孤児」の人たちがおられるということは知っていた。また、時々、中国人の人たちの交流の会がある際に「残留孤児」も参加されており、何度か会うことがあった。「残留孤児」の人は倉石市、五戸市にもおられる。^(注10)

その「残留孤児」のうちの一人が今年火災で危うく亡くなりかけるというショッキングな事件が起こった。多くの「残留孤児」の人たちはかなりの年齢に達し始めている。しかも一人暮らしの人が多い。火災の原因は薬缶の「空焚き」だった。一酸化炭素が部屋に発生し倒れてしまい意識がなくなってしまったのである。幸いに早く発見され、市民病院に運ばれ、どうにか大事に至らず、命は取り留めることができた。

何故このようなことが起きたのか。「残留孤児」の人たちに対する政府の援助は「生活保護」という形で行われている。このことに一つの原因があるのではないかと思う。「残留孤児」の人はほとんどすぐ「生活保護」は受けられるが、このため却って「生活保護法」の制約を受けることになる。これが問題なのである。

この「生活保護法」では、中国から呼び寄せた子供達と一緒に暮らせば、その子供たちの援助を受けているということで「生活保護」の支給が減られるか、或いは打ち切られるのである。もともと子どもたちの生活も楽ではない。ほとんど子どもたちの援助は期待できないのである。「生活保護法」では八戸市を離れば、また支給がストップされるので、遠くの子どもの処にもいけないし、まして中国にも行くことができない規定になっている。

だから「残留孤児」の人たちは子どもたちと一緒に生活できないのである。歳を取って子どもと暮らせなければ、不測の事態が起こることは充分考えられる。これが今回の事件で証明されたことになる。政府がしっかり援助するのであれば「生活保護」によるのではなく、もっと

違う形で援助できないだろうか。

このようなことも、まだ十分に調査し尽くしているわけではない。だが、この事件が、早く調査を始めようと決心したきっかけの一つになったのである。

三 猪鼻百合さんの場合

① 開拓団入植そして逃避行

この住宅で火災で被害に遭われたのは「残留孤児」の猪鼻百合さんである(注)。お会いしたとき、百合さんは火災被害に触れ「私のあの時は本当に死んでいた」と話された。

百合さんは昭和十年三月二十日生まれで、本籍地は青森県八戸市大館村字新井田字横町7番地2号地である。満州国に父親、母親、兄、妹、そして百合さん、一家全員で渡られたのは、昭和二十年三月頃である。当時百合さんは十歳だった。現在、歴史的に見れば、猪鼻一家の渡満の日は日中戦争が終わる六ヶ月前であり、まるで自分から悲惨な不幸の中に飛び込んでいったようなもので、実に暗澹たる気持ちになる。

猪鼻さん一家五人は五戸開拓団として渡られている。その開拓団は満州国遼河五戸郷開拓団である。この開拓団について、『花なき墓標——五戸開拓団の終焉——』^(註11)(以下『花なき墓標』と呼ぶ)で補っておこう。

黒河省遼克県双河鎮は黒龍江を経^マだててソ連領と指呼の間にある。此処に大青森郷開拓団があった。始め昭和十五年五月に青森県内出身の一〇〇戸が入植していたところえ、十八年になって同県より一五〇戸、尾上町から一〇〇戸が相次いで入植したので翌十九年十月になってこの二団を統合し、川崎文三郎が総合団長になって大青森郷開拓団を結成したのであった。^(註12)

この『花なき墓標』によれば、猪鼻一家が入植した先は「大青森郷開拓団」であり、ここは

「黒河省遼克県双河鎮」にあった。当時の満州国はいくつかの「省」に分けられており、「遼克県双河鎮」があったのは「黒河省」である。なお「遼克県」の県城(町)が「遼河」である。ただし「大青森郷開拓団」になったとはいえ、やはり「五戸開拓団」という部落はあって、呼び名も残っていたと考えて良いだろう。

この大青森郷開拓団は、黒龍江に近い、ソ連との国境の傍の開拓団であり、もしソ連と戦争状態になれば、ここが真っ先に被害を受けることは火を見るより明らかであった。しかも、猪鼻さん一家がこの地にやって来た頃は、すでにほとんどの成年男子は軍隊に招集され、開拓団に残されていたのは年寄り、女性、子どもたちという状態であった。この開拓団は関東軍に完全に見捨てられていたのである。

百合さんは「この開拓団の様子は十歳でほとんど覚えていないのだけれど、自分たちの住む家には、まだ前の人が住んでいて、私たちは知り合いの家に住んでいた」と語った。

八月八日ソ連参戦し、ソ連軍が国境を越えて押し寄せてきた。県城の遼河はすぐにソ連軍に占領された。逃避行は八月十一日から始まった。この辺りことを『花なき墓標』では以下のように述べている。

何ととっても国境第一線の開拓団であるから、開戦となれば、すぐに危険にさらされるのは申すまでもない。幹部は鳩首協議の結果、八月十一日に至り総員四七〇名の引揚げを決意した。出発は八月十三日午前十時、まず西隣の三洲義勇開拓団に赴き、更に遙か南方三百里の北安に向かって徒歩避難する計画である。八月十一日全団員に本部集合を命じ、午前十時集結を完了すると間もなく、千米位の上空にソ連機が現れたと見る間に、急降下して国民学校舎に機銃掃射を加えてくる、不意を食らって団員は老いも若きも必死に待避し、幸い一名も犠牲は出さなかったが、今さらながら事態の容易ならぬものを痛感された

のである。^(註13)

「五戸開拓団」(『花なき墓標』では、正式には「大青森郷開拓団」と呼ぶべき処を、どういう訳か「五戸開拓団」と呼んでいる)の、南を目指す、徒歩による逃避行が始まった。途中、大密林の小興安嶺があつて、それを抜け、さらに南下する、七十五日に渡る過酷な逃避行だった。途中で食料も欠き、亡くなった人もあり、また疲労で動けなくなったものは残し、先へ進んで行った。小興安嶺の白樺の丘に残した一〇六名は、一〇月の「北満全部の遣送団が終了するまでにたどり着く者がなかった。」^(註14)

② 中国に残されて以後

この結果「残留孤児」「残留婦人」が生み出されることになったのであるが、この「五戸開拓団」の団員のうちで中国に残された人々は、以後どのようなになったのか、これについては以下の資料を挙げておく。

この資料は、平成4年、猪鼻百合さんが自分の子どもの日本国籍取得のために関係機関に提出されるために書かれた文章のコピーである。(この年に猪鼻さんの子どものうち二人、次男と長女は日本国籍を取得されていた。)これに「五戸開拓団」団員の「残されて以後」のことを猪鼻百合さんの言葉として、窺うことができると思う。^(註15)

ただ今前記の二人の子ども、屈福禄と屈福艶の日本国籍認定をお願いするため、以下の通り陳述いたします。

- 一、私は昭和十年三月二十日、当時日本国八戸市大館村字新井田字横町七番二号地において生まれました。
- 二、私の父(名前)猪鼻常吉、昭和二十年二月頃満州国遼河五戸郷開拓団
私の母(名前)猪鼻キワ昭和二十年二月頃満州国遼河五戸郷開拓団
長男(名前)猪鼻常男(中国名)王文顕

同上

長女(名前)猪鼻百合(中国名)王百合

同上

二女(名前)猪鼻リサ(中国名)杜淑珍

同上

三女(名前)猪鼻サツ 同上六名一家満州国遼河五戸郷開拓団戸籍

- 三、昭和二十年七月頃私の父親猪鼻常吉は戦争の時逃げる途中で山中で苦勞して死亡しました。昭和二十年九月頃頂上から、当時親子五人が出発しました。私の妹サツを道路に置いてあとは行方不明です。私は王会忠という中国人に連れて行かれ、私は養父の娘になりました。昭和二十年中私と母(猪鼻キワ)兄(常吉)妹(リサ)三人がばらばらになりました。

- 四、お母さんたちから離れて、私は三か月を経過したが、中国語を話すことができませんでした。当時私は十一歳です。王会忠が私を收容してその後王会忠夫婦はいつも厳しく、私は忍耐しましたが、忍耐も長く続きませんでした。それで養父の家を逃げました。当時十七歳。

- 五、新中国(中華人民共和国)成立、養父の家を出ました。当年経開拓団保管員三浦さんの紹介で、黒龍江省綏化市林業局老保医院の日本人医師を知りました。(名前)渡辺先生(職業)医師。奥さん(名前)大野さんといいます。(職業)看護婦。二人の子どもいます。女の子と男の子です。そして私は彼らの家に住むことになり、この一家にお世話になりました。生活の中で色々のお話をすることができました。毎週日曜日渡辺夫婦一家、私も一緒に飯店で食事をします。家に親族いるの? と私に問いかけてきました。私は母さんとお兄さん、妹がいます。しかし、現在は妹リサは中国人に連れてゆかれ別の所に行っていました、ある日突然妹を連れて合いにきました。最初は私は六

年ぶりに別れて妹を覚えてないのです。渡辺先生が話しかけて確かめてくれました。私はしばらくして思い出しました。これは確かに私の妹です。と叫びました。元来渡辺先生と妹の養父が友達です。ということで。妹リサをその時に捜すことができたのです。

六、妹を捜すことができたので、本当にうれしく思いました。渡辺先生の家にも一年になりました。私はお母さんの処へ帰りました。お母さんの住所は黒龍江省綏稜県四海店郷十三井屯です。

昭和二十八年三月二十六日（一九五三年三月二十六日）中国名、屈万金と結婚しました。お兄さんは昭和三十一年十二月二十日（一九五六年三月二十日）と中国海倫県護林郷の人、中国名、懂淑珍と結婚しました。現在家族と一緒に日本に永住帰国しています。お兄さんが結婚した後、母の生活も安定しました。私は屈万金と結婚してから、四男、一女五人の子供がおります。

中国名 屈福貴（長男）一九五三年五月二十五日黒龍江省綏稜県四海店郷十三井屯について出産

中国名 屈福祿（二男）一九五七年十月十四日黒龍江省綏稜県四海店郷十三井屯について出産

中国名 屈福珍（三男）一九六二年十月十六日黒龍江省綏稜県四海店郷十三井屯について出産

中国名 屈福祥（四男）一九六五年三月十二日黒龍江省綏稜県四海店郷十三井屯について出産

中国名 屈福艶（長女）一九七二年一月三十一日黒龍江省綏稜県四海店郷十三井屯について出産

（一九八九年四月十一日）二男、四男、長女の三人の子供が私と一緒に日本国へ永住して居ります。私の主人は一九八七年

十一月十三日病死しました。残り長男と三男は日本に来たい希望を持っています。

七、私は日本大和民族の子孫である事を忘れていません。新中国(中華人民共和国)が成立してから次第に、混乱していた情勢が解消しました。しかし、最初の人口調査で私とお母さんは小日本子と言われています。それから私も子供がありましたので、中国籍に改めました。私たちは本当に苦しみました。私は一日も早く自分の祖国に帰りたいと思っています。私の所は中国残留孤児訪問の日はわかりませんでした。何回か手紙を日本の故郷に出していましたが、誰も見ませんでした。昔の住所のまちがいかもしれません。でも、今まで手紙を書いて連絡して、初めて私のこと（高橋竹男）が私の手紙をもらってから、私の一家が満州国に行っている事を知って、引受保証人になってくれました。

八、私は高橋竹男の手紙をもらってから、一生懸命中国の関係機関とか日本駐華大使館とか、日本厚生省にお願いいたしました。昭和六十二年八月二十九日一人の娘を連れて一時帰国しました。日本政府と親族たちから熱烈歓迎を受けました。半年くらいの間に娘は勉強しながら日本政府の義務教育を受けました。いずれも正直な子供達で皆自分の祖国を熱愛し自分の故郷を熱愛しております。ですから私の子供達皆自分の祖国日本に帰って定居することを要望しております。昭和六十三年二月に一回中国にもどりました。そしてこれから皆で祖国日本へ帰る事を決意させました。一九八九年四月十一日日本政府厚生省援護局と青森県庁、八戸市役所等関係部門の懇切な配慮とご援助のもとで私が三人の子供を連れて日本に永住のため再帰国しております。

現住所、青森県八戸市旭ヶ丘1丁目3番地市営C-10-57号に居ます。

今中国に残っている二人の息子、長男と三男が日本に永住帰国の手続きをしています。

今年の四月に日本国青森県八戸市に来る予定だそうです。

九、以上述べたように、私本人、及び日本にいる三人の子供の国籍は従前のとおり改変されていないで、やはり中国籍であります。私が中国籍に加入した件については、本申述書の第六項で説明いたしました。当時私は児童であり、その当時の状況については無知でした。したがって養父が当時の情勢にしたがって私を中国籍に記入報告したものであります。

十、現在私本人と子女二人が中国籍を離脱して日本国籍に加入することについては何等の異議もありません。私達は現在永住帰国の願望が実現していますが更には中国の戸籍から日本国籍に変更して、正々堂々名実相伴うところの日本人になることを希望しております。どうぞ慎重に実状をご審査の上、一日も早く私達の希望を実現させてくださるようお願いいたします。

おわりに

このテーマはこれで終わりはしない。冒頭に述べたように、まだ資料収集も、先行研究の調査も充分ではない、これからの仕事であると考えている。今回のこの小論の掲載は、調査研究が走り出したという示すためのものである。以後、この調査研究がどのようなものになるのか、今は予想もつかない。ただはつきりしているのは、早く猪鼻さんのような「中国に残された日本人」の体験、見聞といった話を聞かなければ、これからは証言してくれる人が確実に減って行くだろうということである。

また、「残留孤児」の問題は「満州国」と大いに関係がある。今回のテーマを調べて行くうち、満州国が一体どのようなものだったのか、というような興味も生まれてきている。実際に満州国で育った人の話を聞き、そういう人の書いた文章も読んだ。また、満州国に関する写真、映像も見てみた。筆者の頭に満州国を企てた人々、そこで生まれ、生活をしていた一般の人々が入り乱れている。いつかそれを一つにまとめてみたい。(完)

注

- (1) 『氷晶のマンチュリア (満州)』(河内美穂著・現代書館・1994) この著者も遼寧大学に筆者と同時期に留学しており、「残留婦人」の話を一緒に聞いていた。
- (2) 『氷晶のマンチュリア (満州)』p. 11
- (3) 同上
- (4) 同上
- (5) 同上 p. 12
- (6) 話の内容については同上の本に詳しく書かれている。
- (7) 日本にいる、この叔母さんたちとは連絡を取り合っている。
- (8) この引用文は『残された日本人』(新井利男・経書房・1986・p. 124) から取った。この本の「第二章 残留婦人」で、筆者が瀋陽で知り合った四人の「残留婦人」が実名で紹介されている。ここに載っているのは「葉山寿恵子」「藤田初枝」「須波厚子」「高井百合子」さん方である。この本にある葉山さんの話は実際に私が聞いた内容と全く同じだったので、そのまま引用させてもらった。
- (9) この件については拙論「中国残留婦人の現在を追う」(東方(東方書店発行)83号, pp. 20-22) で述べたことがある。
- (10) 昭和二十六年三月二十日に日付になっている「五戸郷開拓団在籍者名簿」が「青森県三戸郡五戸町役場内 五戸引揚開拓民相談所 川崎文三郎」の名前で整理されている。此处に名前があり、さらに交流の席で紹介されたこともある。名前も分かっている。
- (11) 『花なき墓標——五戸開拓団の終焉——』(川崎文三郎・五戸開拓団遺族会・昭和38年) この本は開拓団の団長で満州から引き揚げてこられた川崎文三郎氏の執筆、編集によって作られたものである。

- (12) 『花なき墓標——五戸開拓団の終焉——』p. 1
- (13) 同上
- (14) 同上 p. 21
- (15) 猪鼻百合さんの父親がなくなる記事が『花なき墓標——五戸開拓団の終焉——』p. 10 に見える。